

タイトル: ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」(全・186ページ)

出版社: 世界思想社

2021年10月31日(第1刷発行)



著者: ウスビ・サコ氏: 京都精華大学学長。1966年、マリ共和国の首都バマコで生まれる。1991年、留学のため来日し、京都大学大学院で建築計画を学ぶ。2001年に京都精華大学人文学部講師に着任。「空間人類学」をテーマに、国や地域によって異なる環境やコミュニティと空間のリアルな関係を研究。2002年、日本国籍を取得。2018年4月、同大学学長に就任。学生とともに京都のコミュニティの変容を調査し、マリ共和国の共同住宅のライフスタイルを探るなど、暮らしの身近な視点から、多様な価値観を認めあう社会のありかたを提唱している。

概要: 30年にわたる日本生活での失敗と、発見、希望をユーモラスに語っている1冊です。

日本・京都の生活のなかで感じた疑問や驚き、困惑や感動が、本人のキャラクターを感じられるユーモアたっぷりの文章で綴られています。

「トイレのスリッパ」や「花見」といった、日本人にとって当たり前となっている慣習に対する指摘や、日本国籍を有していても「外国人」として対応を求められる日々の視点など、日本や日本人の姿を見直す機会にもなるはずです。

本書の出版に際し、脳科学者の茂木健一郎氏や、漫画家のヤマザキマリ氏が推薦文を寄せられています。

本書コンテンツ

【はじめに】

・・・にぎやかでよろしいね(=うるさくて迷惑です)

・ 日本の「あたりまえ」が実は「あたりまえでない」事に驚ろかされるかも知れません。

【序章】空気読めない

…暗号の国

- ・ 日本のコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションが非常に大切です。
- ・ 日本の「空気を読む」文化は、シンプルなコードではありません。
- ・ 「僕はコーヒー」はおかしい。/ 「ちょっと」と言う難問。/ 「結構です」も難しい。/ ホンネを言わない日本人達。
- ・ 日本の「空気を読む文化」は、「冷たい空気」に繋がっていないか、「空気」について再考すべきかも知れない…。

【1章】無宗教

…「いただきます」って、宗教やん

- ・ 日本の社会には宗教意識が深く浸透していて、日本人はさまざまな行為を無自覚に行っていると言えるのではないのでしょうか。例えば、「いただきます」「ごちそうさま」「お邪魔します」の言葉。
- ・ 日本の無宗教コミュニティの包容力は、グローバル社会での異なる宗教同士の共存を可能にするヒントがあります。

【2章】住 宅

…日本はスリッパ多すぎる！

- ・ 日本にいる外国人に効果的なのは、日本の家や生活(スリッパ、靴下、多機能トイレ、ゴミ出しコミュニケーション)における暗黙のルールを「見える化」する事です。

【3章】おもてなし

…逆にこっちが、疲れるし

- ・ おもてなしを形式的にとらえ、思考停止してしまっているのは、人間と人間のコミュニケーションは生まれません。
- ・ 説明しすぎてしまうと、奥ゆかしさが損なわれるのは事実ですが、相手に伝わらなければ意味がありません。
- ・ 世界中の方々を日本へ招き、「またここに来たい」「ここは自分の居場所なんだ」と感じてもらえるよう、心からもてなしをしたいと思っています。

【4章】花 見

…暗くて桜、見えへんやん！

- ・ 花見の文化は、人間関係の壁を崩す機会です。
- ・ マリと日本の決定的な違いは気候と季節そのものです。日本には四季があり、日本の一年は桜に始まります。

【5章】マナー

…まわり見えてない行列やな

- ・ 日本人の規律の正しさや、マナーの良さは国外でも有名ですが、他人の目がないとルールがなかなか機能しません。
- ・ そのため、ルールを守ることそのものが目的化してしまい、誰も見ていないところではルールを破っても構わないという思考が根づいてしまうのです。
- ・ 共生社会のルールとは、「ルールだから」と受け身になって思考停止するのではなく、主体的に判断し、臨機応変に行動するしなやかさが必要なのだと思います。

【6章】観光地

…この場所、矛盾だらけやで

- ・ 京都は文化を商品化することに長けています。
- ・ 京都の文化は生きた感じがします。芯は維持したまま、外面だけを時代に合わせる事が非常に上手いのです。
- ・ 日本人は、自ら率先して決断する事を避ける一方で、他人に指示されたら過剰に推し進める傾向があります。観光についても同じです。
- ・ 京都に限らず、日本の各地の観光地は、様々なジレンマを抱えている中で、「顔の見える関係性を大切にされている方々」を見かけるたびに、私は希望を感じてしまいます。

【7章】外人

…マリーにハロウィン、ないねんけど

- ・ 異文化圏に属する他者を一定の「フレーム」に収めることは、古くから存在する行為です。そのフレーム化は、歴史的に差別の構造として機能してきたと考えていいでしょう。
- ・ 日本は、歴史や文化によって人や物事をカテゴライズしてきた面が強いと感じます。「日本人でない」＝「外人枠」とひとくくりにするのです。
- ・ スイスの作家であるマックス・フリッシュが、ドイツの移民問題に対して、「労働力だけがほしかったのに、人間がついてきた」との警句を述べています。
- ・ 日本にやってくる外国人労働者たちに、「郷に入りては郷に従え」というのもひとつの真理ですが、日本人も彼らに歩み寄って、お互いの価値や習慣を認めあい、学びあう事が求められているはずです。
- ・ そういったかわり合いの中からこそ、新しい地域文化が生まれ、新しい共同体が発展するのではないのでしょうか。

【8章】日本人

…朝ごはんから、全体主義？

- ・ 個人というひとつの単位に固執するのではなく、自分を複数化し、時と場所に応じて使い分けるという考え方が、「分人」です。まさに現代は、そういった「分人」「マルチフレーム」のあり方が模索されている時代なのだと思います。
- ・ まさに「日本人」というフレームは、「文化」だと言えるでしょう。絶対的な性質ではなく、あくまで後天的に身につける現象に過ぎないのです。
- ・ 多様なフレームを認めあう社会——私はそれが、美しい世界なのだと思います。

【終章】空気を読む

…共生の知恵

- ・ 「日本の空気」は、よそ者がひとり入り込むだけで崩れてしまいます。日本人同士の暗号によって作り上げられてきた秩序は、多様化する社会においては、驚くほどに脆弱なのです。
- ・ 「空気」が、無自覚的に他者を排除し、内側に逃げ込むために利用されてしまっているならば、本末転倒です。それこそ、「公共性の喪失」にほかなりません。
- ・ 「空気を読む」という枠から一歩引いて、日本を見つめなおさなければならないのではないかと、「空気を読む」ことそのものを、読む必要があるのではないかと。「私は、そのような思いから、この本を書こうと思いました。」
- ・ 「間」自体は主役ではなく、目には見えません。だからこそ、誰だろうと招き入れ、コミュニケーションをさそうのです。一見、無色透明でありながらも、人びとがそれぞれの色を反映できる文化を、日本は古くから育んできました。
- ・ コミュニケーションは、自然発生するものではありません。意志と努力で、人為的に作り上げるものです。この面倒な営みをとおしてしか、私たちは共生できません。
- ・ 日本人が外国人に手を差しのべたいならば、「足元の文化」（例えば茶道、など）と、「身近な異文化」を見つめなおす必要があります。

- ・ 日本は今、壁の中に閉じこもり、「空気」の読みあいにより神経をすり減らすのか、扉を開いて多様な人びとを受け入れ、新鮮な「空気」のなかで共生社会を楽しむのか、という岐路に立っています。

【おわりに】

- ・・・「なんでやねん」という哲学
- ・ 著者の「なんでやねん」は、イベントなどで期待されている向きもありますが、それはクリエイティブな営みであり、必要なのは「あなたから生まれる『なんでやねん』なのです」。

以上